

《企画書》

提出者 じゅんこ3

【タイトル】置いてけぼりのロンリーちゃんを助けに行こうーあなたの恐怖感と絆を結ぶ本ー

【概要】

本企画は「私の恐れと絆を結ぶ」とテーマに、自分の中にある恐怖や不安（置いてけぼりのロンリーちゃん）と向き合い、受け入れ、ともに歩いていくための本です。ロンリーちゃんの声を見向きもせず無視し続けていくとどうなるのか、逆に感謝を伝えて、うまく育てていったら人生がどう変わっていくのかをお伝えします。読者の皆さまが「ロンリーちゃん」と絆を結ぶことによって、愛と楽しい未来が広がっていく、そんな本でありたいと願っています。

【想定する読者ターゲット】

- ①20代から60代の男女
- ②恐怖感や不安感を抱えて生きている人
- ④生きづらさを抱えている人

【構成案】

はじめに

第一章 「もうひとり」の声は悪なのか？

- ・恐怖や不安は、人間の防衛本能
- ・本当の気持ちに気づこう

第二章 「ロンリーちゃん」を放置しない

- ・ロンリーちゃんの声を聞く
- ・その声を見向きもせず無視し続けていくとどうなるか
- ・ロンリーちゃんを味方に育てる方法

第三章 大丈夫、あなたは愛されている

- ・ロンリーちゃんを抱きしめ、感謝する
 - ・愛されていることを思い出す
- あとがき

【サンプル原稿】

はじめに

「先生、私のお父さんね、死んじゃっていないの。だから今度の父親参観日にお父さん来れないよ」

担任の先生にそう伝えた私は小学二年生だった。一年ほど前に、父は自死で亡くなっている。時に、子どもという者は純粹過ぎて残酷だ。

私は「自死遺族」という苦しみを背負い、毎日のように泣き、十分過ぎるほど心を病んで、やっとのことで答えを出した。

「この苦しみを、これ以上世界に広げてはならない」と。

父の自死から今年で四十年。真っ暗な日々は、いまでも確かに続いている。

ある日、父の書物を読んでいた時に、彼が「もうひとりの自分」の声に悩まされていたことに気がついた。

「世俗的な幸福の飽和状態の中で、どこからともなく『おまえを支えているのは何なのだ』という声が聞こえてくる。一体何が支えているのか皆目わからず、一抹のさみしさを感じてその声の前に佇んでいる」（父の日記より）

その声は、「置いてけぼりのロンリーちゃん」の声だ。その声は、悪なんかじゃない。ずっと無視してきたから攻撃してくるようになったのだ。その声と、本当のあなたの声と会話する勇気を持ってほしい。もし、その声とうまく付き合うことができたのなら、あなたの人生がいまよりもずっと、よりよいものに激変するんだ。

「置いてけぼりのロンリーちゃん」は本当のあなたを教えてくれる。本当にこれでいいのか、大切なことは何なのか教えてくれる、あなたの味方なんだよ。

あなたのロンリーちゃんは、なんて言っている？

まずは、そっとその声を聞いてみることから始めよう。